

# DESIGN MUSEUM JAPAN展

NHK様主催の「DESIGN MUSEUM JAPAN展」で多孔陶管が展示されました。



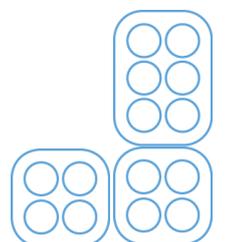
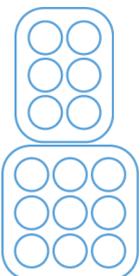
## デザインミュージアムジャパンとは？

NHK様が2020年1月から デザインミュージアムをデザインするという番組を制作され、  
第一線で活躍される全国のクリエイターの方々と共に、日本各地の「デザインの宝物」を  
選び出し、ひとつのデザインのミュージアムを浮かび上がらせる取り組みです。

その素晴らしい取り組みに多孔陶管も選ばれました！

展覧会では「時代が求める陶器を生む町」として常滑が紹介され、  
電纜管ハウスと現在も活躍している多孔陶管が紹介されていました。  
とても素敵な空間でした。

このような素晴らしい機会をいただいたことに感謝いたします。



# DESIGN MUSEUM JAPAN

## 国立新美術館での展示の様子



### 電らん管 実はここがすごい!

**製造工程に光る技術力**  
電らん管製造のなかで最もデリケートな工程が乾燥です。孔が多く、サイズが大きい電らん管を均一に乾燥させるのは至難の技。ひびや割れを防ぐため、低温で1次、高温での2次の乾燥工程には約2週間を要します。特別な環境下で、湿度や温度の丁寧なモニタリングが必須です。

**強固なのに柔軟**  
様々な地形や環境に応じて施工をする必要があるため、長さも様々。連結パーツやカーブを描いた変形の管もあります。

**昔からずっとエコロジカル**  
焼きものという特性上、リサイクルが容易な電らん管。製造途中で出たカスや不良品も、そのまま工場内で再利用されるため、素材の無駄がありません。寿命が長く、60年以上使われているものもあり、ライフサイクルコストに優れていることも注目されています。




### アップデートし続ける電らん管

多孔陶管、通称「電らん管」は、埋設ケーブル保護に使われます。耐火性に優れ、強く、錆や腐食の心配がなく、安価で施工のしやすさも相まって国内外の空港やトンネル、道路で採用されています。一見単純な形ですが、ケーブルを取納する孔を複数組み込んだ構造を実現するには高度な技術と丁寧な手仕事が必要。日々変化を遂げる電気網や通信網に応じてケーブルの仕様も変わるため、多孔という基本的な構造は保ちながらも徐々に更新されています。最近ではメンテナンスや取り替えのしやすさを考慮した地上から見えるタイプも登場。従来の埋設するものと比べ、コンパクトで軽量、なおかつ耐久性も持ち合わせています。

**多孔陶管（電らん管）**  
本施設建設された時点で、地上に露出した状態で施工が可能なためケーブルの入地メンテナンスが容易な中空構造を採用。日本国内の様々な気候や土壌に対応できるように、1980年に製造された陶管で、電らん管についても同様のものが製造されています。

**電らん管の施工例**  
両管は北のヒノキアスファルトとつなぎ継ぎして管路を延長する



**愛知・常滑**  
片岡真実

時代が求める陶器を生む町

「すだれレンガ 電らん管」

DESIGN MUSEUM JAPAN

### 愛知・常滑

## 「すだれレンガ 電らん管」

### 時代が求める陶器を生む町

×

片岡真実 キュレーター / 森美術館館長

愛知・常滑

片岡真実さんは、「それぞれの時代が求める焼き物を作り続ける町」愛知県常滑市をリサーチ。常滑焼は中世から続く代表的な8つの産場「日本六古窯」のひとつで、産業陶器の産地として知られています。今回、注目したのは「田舎器（ネトル）」（1923年竣工）に使用された「すだれレンガ」と、ケーブルなどを土中で保護する電らん管を用いて作られた「電らん管ハウス」（1955年竣工）です。「誰もやったことがないことのある使命感や使命感をもって別にするためには、工夫やアイデアが必要で、それをやってのけた人たちが作ったもの」という意味で2つはすごくつながっていると思うと片岡さんは言います。



